

## 9) ムクゲ=木槿

ムクゲはアオイ科の落葉低木で高さは2~3m、中国の原産で灰白色の枝の外皮は繊維質に富んでおり、ハサミでないとなかなか切れない。夏から秋にかけて花径6~10cmの大型のラッパ状の花を朝開き、一日で萎んでしまう。花色は豊富で淡紅紫色を中心に、白や日の丸といわれる覆輪のものなど数多くあり、八重咲や半八重咲のものもある。和名の由来は中国名の『木槿』によるもので、別名ハチスともいう。これは朝開花して、夜には閉じてしまう蓮の花に似ているからである。学名は『*Hibiscus syriacus*』で、属名は前種のハイビスカスと同じで、種小辞はシリアのという意味である。漢方では白花の蕾を乾燥させたものを『木槿花』(モッキンカ)といい、これを煎じて胃カタルや下痢止めにしたが、花は食べることもできる。また木皮は『木槿皮』(モッキンヒ)といい水虫などの薬に用いられた。

古代の中国ではこの花を『舜華』と呼び、朝開き夕べには萎む瞬間の儂い花ととらえていた。また『時経』(ジキョウ)には女性の顔を舜華にたとえた例もある。日本でも「槿花一朝の夢」などといい、古来より儂いものの例えとされてきた。朝鮮では花は短命であっても長く咲き続けることから、『無窮花』(ムグンファ)と呼び、朝鮮という呼称も朝、鮮やかに咲く木槿に因んだものである。ムクゲという発音はこのムグンファが転じたものといわれ、無窮花は韓国の国花にもなっている。

この花が日本に伝来したのは平安時代以前のことと思われ、10世紀に刊行された『倭名類聚鈔』には木槿の和名として、木波知春(キハチス)の記述があり、これは木に咲くハチスという意味である。1681年に出版された『花壇地錦抄』には、色の異なるものや八重咲種などを含めて12種があげられている。中でも『そこあか』といわれた品種は、蕊の周辺だけ紅色であとは純白。千利休の孫にあたる千宗旦に愛でられたために、宗旦木槿(ソウタンムクゲ)といわれて親しまれている。

木槿は初期の生け花の世界では、なぜか禁花とされており、1536年に成立した『仙伝抄』(センデンショウ)では「禁花のことむくげ」と記され、1661年に成立した『替花伝秘書』(カワリハナデンヒシヨ)の中でも「嫌い物の事」として上げられている。同様に1684年の『立華正道集』(リッカショウドウシュウ)にも「祝儀に嫌うべき物の事」とされ、立華正道集では「水際につかふ草木の事」と記されている。これはおそらく短命の一日花であることが嫌われたためであろう。しかし同じ理由により茶花として用いられるようになり、江戸時代以降は宗旦に愛されることとなったのである。

木槿の木皮は強靱な繊維質でできており、江戸時代には紙を漉いたことが文政年間に著された『大和木経』(ヤマトモッキョウ)の中に記されている。材としては楮(コウゾ)よりも優れ、このために垣根などにもよく植えられていた。芭蕉が

道のべの 木槿(ムクゲ)は馬に 喰われけり

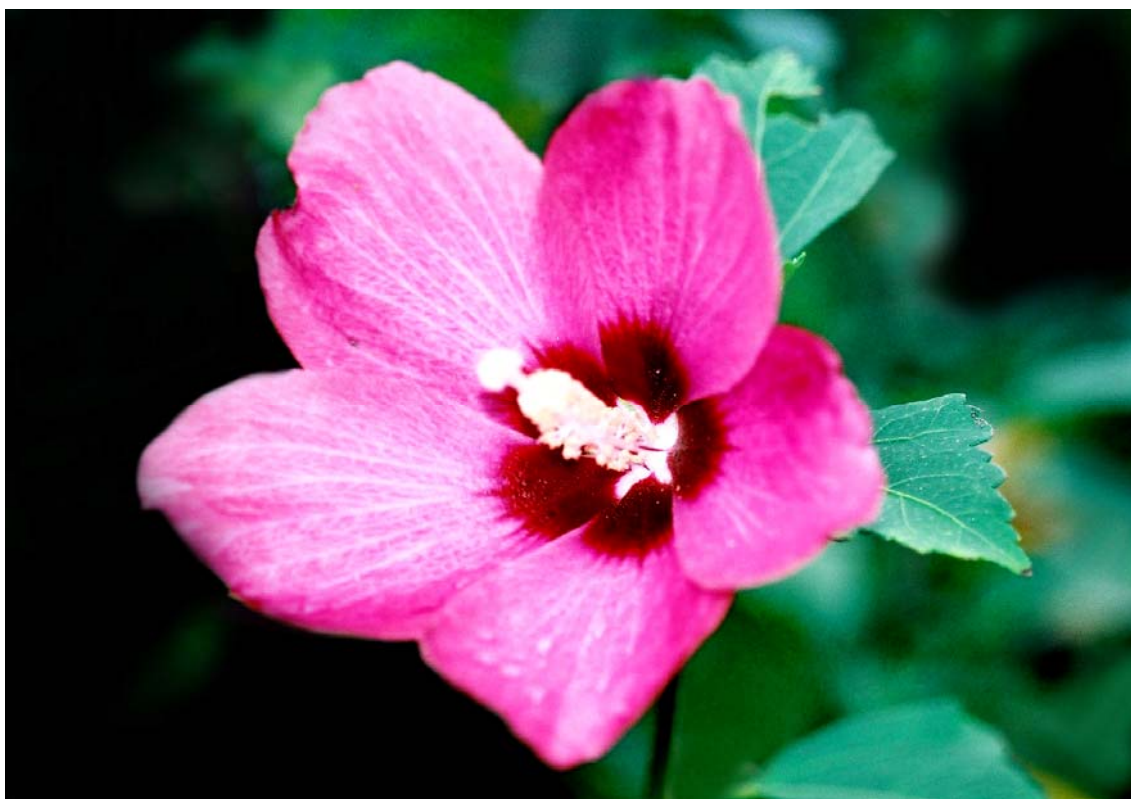
と詠んだのもそれなりの理由があった。繁殖は梅雨の頃挿し木するとよく活着する。



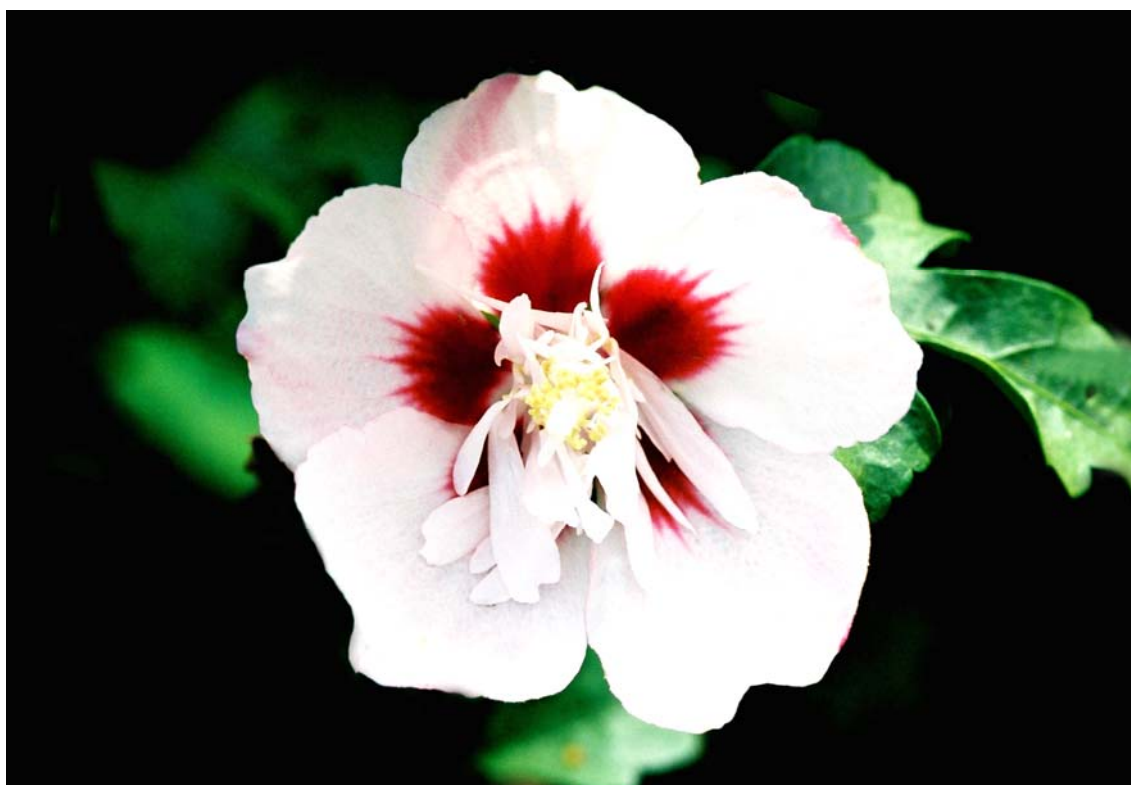
千宗旦に愛でられたという宗旦木槿(ウツムギ)、前種と同様にハイビスカスの仲間、花は一日花である。このため『槿花一朝の夢』などという熟語も生まれた(さいたま市緑区)。



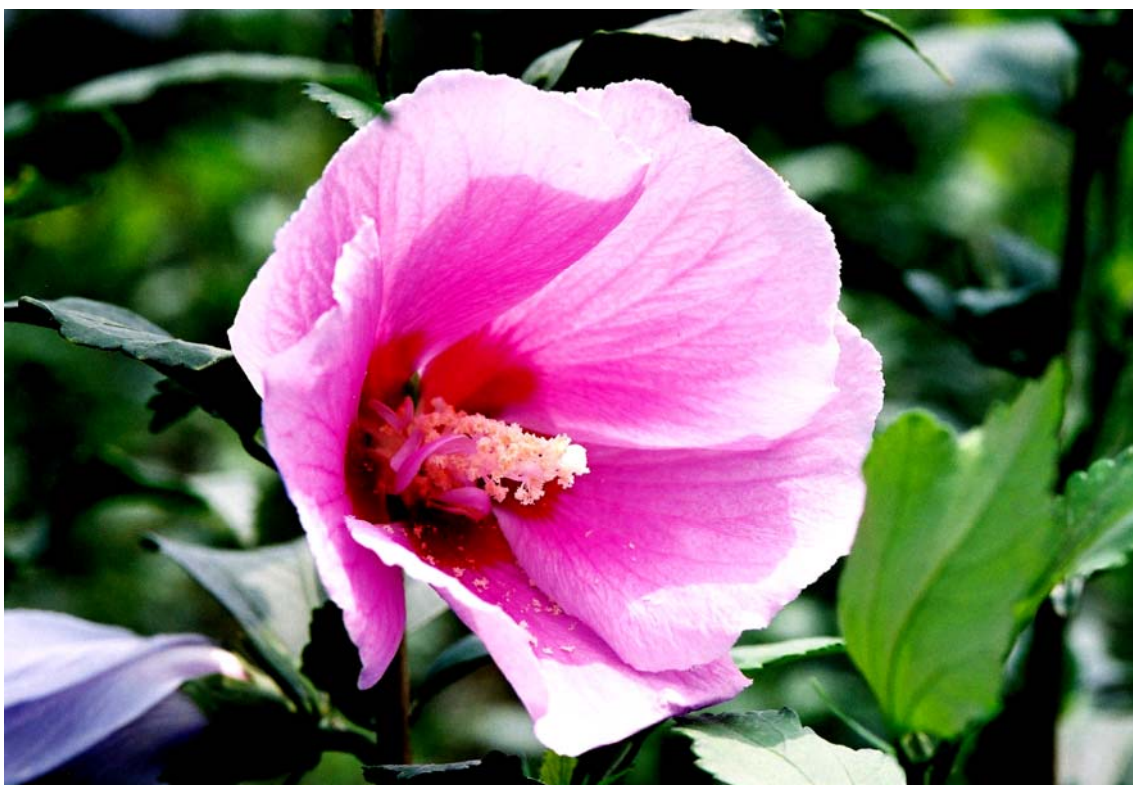
ムクゲの花はお隣「韓国の国花」である(さいたま市緑区)。



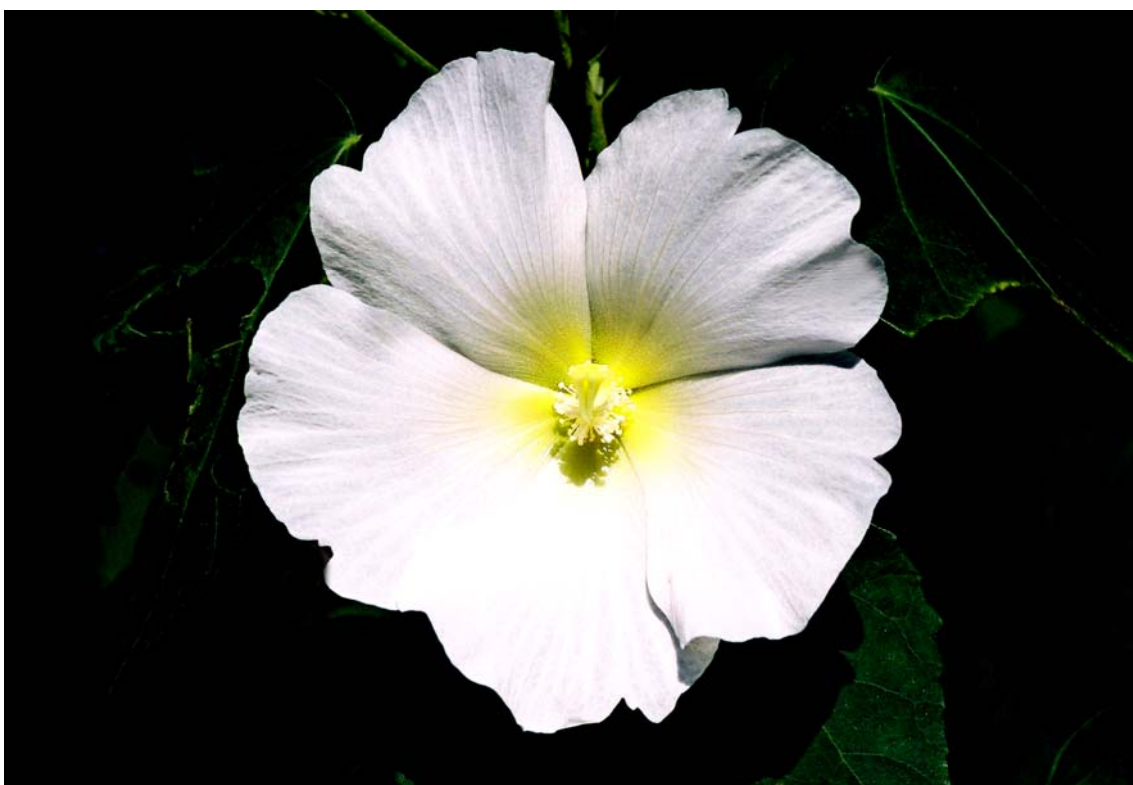
ムクゲの花は挿し木で簡単に増やすことが出来るので、お気に入りの花と巡り会えたら、赤玉土か鹿沼土に、鉛筆ぐらいの枝を挿しておくといい。すぐに苗が出来る(さいたま市緑区)。



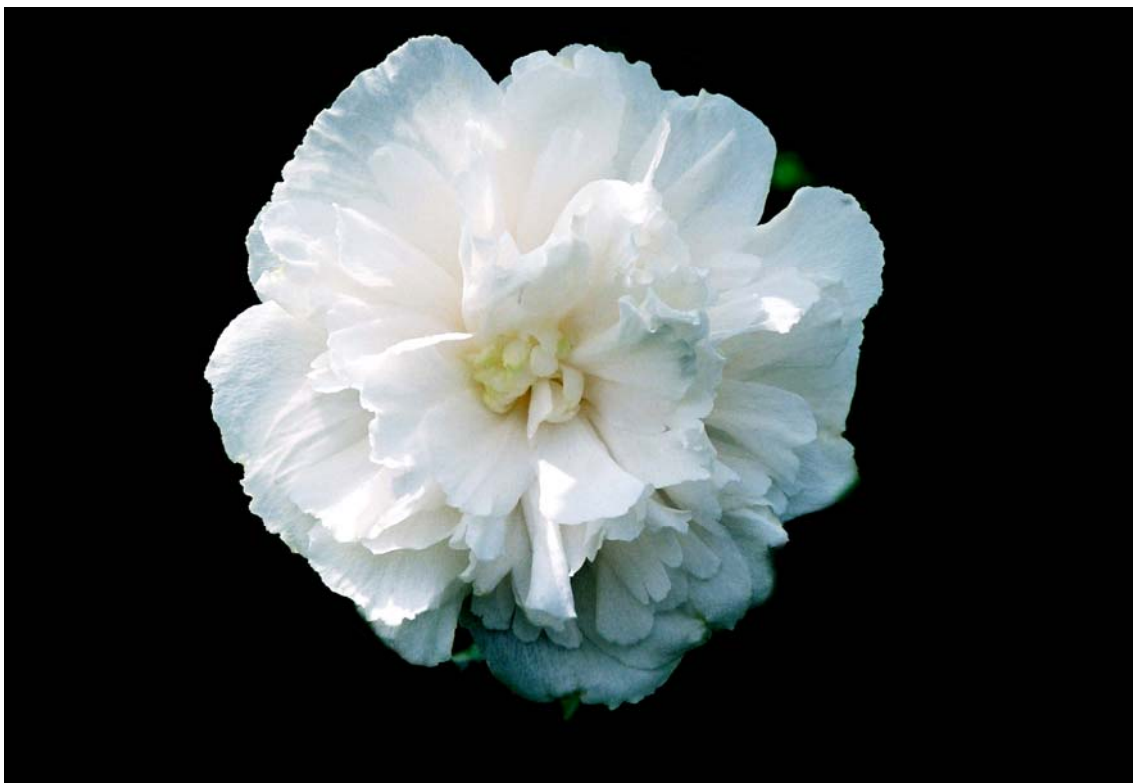
ムクゲの花、この種は雄蕊が花弁化している(さいたま市緑区)。



ムクゲはどれも一日花である。しかし木が少し大きくなると、日替わりで次々と花がまた開くから、秋が来るまで花が途切れることはない(さいたま市緑区)。



純白のムクゲはなぜかあまり見かけない。底紅だったりすることが多い(さいたま市緑区)。



八重咲のムクゲの花は比較的珍しい。ただこの季節やや暑苦しさは否めない。このためにあまり熱心に繁殖されなかったのだろう(さいたま市緑区)。



八重咲のムクゲ、この花は雄蕊がかなり弁化している(さいたま市緑区)。

[目次に戻る](#)